

視覚障害者職員のための図書館システムの運用

2R-7

下村 有子 (金城短期大学) 水野 舜 (金沢工業大学)

1. はじめに

図書館業務もコンピュータ化が進み、パソコンとバーコードなどを利用することにより、図書検索や貸出、返却、予約などの業務が簡略化されてきた。このような入出力機器の使用は、一方では障害者も図書館業務につくことを可能とする。我々は音声出力装置、バーコードリーダを使用した視覚障害者も使用できる図書館システムを開発した。このシステムにより視覚障害者は貸出業務の仕事を開始し、現在、晴眼者職員と曜日交代で業務を行っている。本報告では、このシステムの概要、効率評価、問題点、及び今後の課題について述べる。

2. 点字図書館システム

視覚障害者職員が勤務する図書館は点字図書館であり、蔵書として点字図書と録音図書を有している。このシステムが完成するまで障害者職員は点字の校正員であった(現在も兼務している)。このシステムは図書館業務の簡略化と、障害者職員も利用するという点に重点がおかれ、システム作成を行った。図1で示すように、障害者職員が検索も貸出業務も行えるようになっているが、その他の業務の中には、障害者ではどうしても扱えない業務、確認できない業務が少し存在する。例えば、印刷物の確認や原データ(印刷物)からのデータ入力である。このシステムの完成によりすべての蔵書と利用者カードに点字コードが張られ、障害者は貸出業務を開始している。

3. 視覚障害者職員システム

晴眼者システムとの違いは、出力装置である。晴眼者は、出力装置が主としてディスプレイであるのに対し

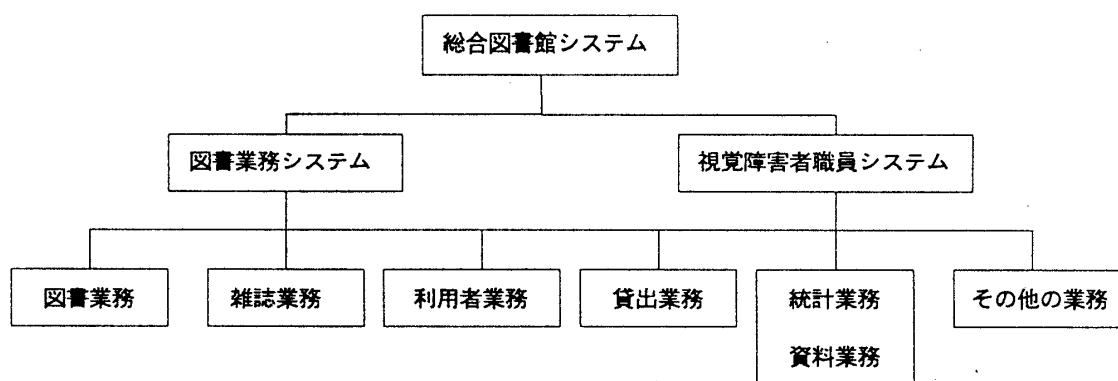


図1. システム構成図

Operation of Library Management System for the Blind

Shimomura, Yuko (Kinjo College)

Mizuno, Shun (Kanazawa Institute of Technology)

して、障害者は音声出力装置である。このシステムの切り替えは、障害者が電話での受け答えなどですぐに操作できるように、キーを1つ押すことにより行える。また障害者は現在の画面展開がどこまで行えているのか判断できないので、確認を音声で出力するようになっている。その他の部分においては、前述の通り、晴眼者システムとほぼ同一である。

4. 運用評価

このシステムは、特に貸出業務は晴眼者が1年間テスト運用を行い、その後に障害者が業務を開始した。現在は曜日を分けて業務を行っているが、以下の項目において比較評価を行った。

(1) スピード

本の取り出し、確認には、点字で読み取り作業を行うので、速さは障害者が劣る。しかし、コンピュータ操作では差異はない。

(2) 確実性

晴眼者はコンピュータデータに間違いはないと信じ処理を行っていくが、障害者は毎回本のデータを読み取りながら業務を遂行するため、正確さは確実な上に、コンピュータデータの間違いも指摘している。

(3) 応用力

晴眼者、障害者共にプロであるために、大いなる応用力を有しているが、障害者は、利用者も障害者であるため、相談やアドバイスという点では、有利であると思われる。

(4) 不可能なこと

障害者はあて名ラベルの印刷は確認が不可能であるが、工作上必要となっているので、印刷を行ってラベルを張り付け、郵送業務を行っている。このように、コンピュータ処理では、自分でペンを持って書けずとも、操作さえミスを行わなければ、99%正しく処理されていく。一方、不可能な例として、新刊図書の購入済みであっても、点字コードが張られなければ、貸出業務を行えない。

5. 今後の対策

このシステムは、晴眼者、障害者共に使用するという前提で作成されたシステムである。晴眼者にとっては普通のシステムであり、両用のために使用しづらいということは全くない。但し、このシステムを障害者が使用するためには、すべての蔵書に点字コード、バーコードを張るという作業が必要であった。また障害者は、コードによって書架より本を取り出すため、コード順に蔵書を並べ変える作業も発生した。これらの作業を業務開始前に行うことにより、業務開始後は、障害者は大きなミスが1つもなく、業務を行っている。このように障害者にとって使いやすい環境やシステムは晴眼者にとっても使用しやすいものと言える。

6. おわりに

障害者用にコンピュータを使用した業務の確立は、今までにほとんどなく、このシステムが運用されるというのは有意義であると思われる。現在全国の点字図書館10館と盲学校1校で運用中であり、問い合わせや導入希望等も続いている。そして、多用システム（視覚障害者用、聴覚障害者用など）が主流となるシステム作りが行われることを希望し、また我々の今後の課題である。